

# 田舎暮らしを楽しむ

(18)

佐藤 彰啓



茨城県から八ヶ岳に移築された古民家

「やっぱり古い民家は心が落ち着きますね」。東京都調布市に自宅があるSさん(61)の週末田舎暮らしの家は、茨城県から八ヶ岳に移築した民家である。取り壊される予定だった築百五十年のかやぶき民家を譲り受けて移築した。Sさんはその情報を「民家バンク」から得た。今、日本の民家は急速に減っている。空き家となって住む人がいなくなったり、新しく家を建てるために取り壊されたり。こうした民家を登録し、譲り受けたい人と縁結びするのが

## 民家再生

## 見直しに期待

### 家の手当て(6)

「民家バンク」である。所有者は無償で提供し、取り壊しの諸経費は譲り受ける側が持つ。

民家バンクを運営するのは民家の保存、再生運動に取り組むNPO法人日本民家再生リサイクル協会(電話03・5216・3541)。古民家情報の公開で廃棄される民家がずいぶん救われることになった。

民家を移築再生するのに費用はどのくらいかかるのか。結論からいえば、「移築民家は新築住宅

の約二割増」といえる。新築住宅が坪(一坪は三・三平方メートル)単価六〇万円なら、七十万〜八十万円が目安。

移築にかかる費用は、解体費+運搬費+再建築費である。再建築に使うものは、柱と梁(はり)の構造材や建具などで、屋根や壁材はほとんど取り換えることになる。

柱や梁は再利用するが、建築には新築と同様の費用がかかるうえ、解体費や運搬費が必要のため割高になるのである。もっとも太い大黒柱や梁に新材を使つて民家を建てれば、坪単価は百万円をはるかに超える。

民家は、現代の暮らしに合わせて快適な空間として再生することができ。また、九州に残した実家を関東に移築した人もおり、遠隔地であっても移築は可能だ。

古民家は再生後も百年以上の寿命があり、三十年前後で廃棄されることの多い新建材の住宅とは違う。環境問題からいっても、民家の再生はもつと見直されていい。(ふるさと情報館代表)